特別な支援が必要な生徒の生活・学習習慣の確立に向けて
～生徒Ａが円滑に中学校生活になじむための指導・工夫～

１．設定理由

特別支援学級の担任として初めて生徒Ａに出会ったのは、入学式の時だった。中学校生活が始まり、徐々に不適応症状が見られるようになった。教科担任制、移動教室の多さ、制服の着用など、小学校との違いや生活体験の不足が原因として考えられた。そこで生活習慣や学習習慣を見直していくことで、中学校生活に早く慣れるのではないかと考え、指導、支援していくことにした。具体的には「公共の施設や日常生活でよく使う道具の使い方がわかる」「自分から、相手に伝わる声の大きさで挨拶ができる」「呼ばれたときに返事をすることができる」「自分の気持ちを相手に伝えることができる」「時間を守ることができる」「掃除にとりくむことができる」「意欲的、継続的に学習を進めることができる」という、社会に出るうえで求められる力である。基本的な生活習慣や学習習慣を確立することでＡの不適応は減るのではないかと考え、指導、支援にあたることとした。

２．研究仮説

生徒Ａの実態を明らかにするために、教職員が授業や生活に寄り添いながら学校生活や学習場面での課題を明確にする。また、ライフステージに合っためあてを立て、一人でできることやがんばれることを増やしていけば、自己肯定感が高まり、意欲も増加し、さらなる成長につながるだろう。

３．研究内容

（１）実態把握（入学当初のＡについて）
（２）担任の指導・支援方針について
（３）生活習慣の確立
（４）学習習慣の確立

４．結論

○Ａの実態を明らかにし支援の方法や内容を焦点化することで、生活体験の不足を補うための場の構造化を図った。結果、一人でできることやがんばれることが増え、Ａの中に自信ややる気が生まれ、以前より積極的にとりくむようになった。

○慣れていないことに対しては尻込みしてしまう様子がよく見られる。特に交流学級に入ってしまうと、周りのペースについていけなかったり、特別支援学級でできることができなくなってしまったりすることがあるので、今後も自己肯定感を高めていく必要がある。

山武支部
山武市立成東東中学校
入江　美穂

1　研究主題

特別な支援が必要な生徒の生活・学習習慣の確立に向けて

～生徒Ａが円滑に中学校生活になじむための指導・工夫～

2　主題設定の理由

特別支援学級の担任として初めて生徒Ａに出会ったのは、入学式の時だった。中学校生活が始まり、徐々に不適応症状が見られるようになった。教科担任制、移動教室の多さ、制服の着用など、小学校との違いや生活体験の不足が原因として考えられた。そこで、生活習慣や学習習慣を見直していくことで、中学校生活に早くなじめるのではないかと考え、指導、支援していくことにした。具体的には「公共の施設や日常生活でよく使う道具の使い方がわかる」「自分から、相手に伝わる声の大きさで挨拶ができる」「呼ばれたときに返事をすることができる」「自分の気持ちを相手に伝えることができる」「時間を守ることができる」「掃除にとりくむことができる」「意欲的、継続的に学習を進めることができる」という、中学校生活で求められる力である。基本的な生活習慣や学習習慣を確立することでＡの不適応は減るのではないかと考え、指導、支援にあたることとした。

同時に、早い段階から中学校卒業後を見越した支援を取り入れるべきではないかと感じた。理由のひとつとして、小学校で積み重ねた基礎的な体験を場面に応じて自分でできるようにすることが、中学校における自立支援ではないだろうかと考えた。中学校は先に進む出口とも言えるため、更なる自立を促していきたい。

以上の思いから、Ａの実態に応じて生活体験を増やし「生活・学習習慣の確立」を本研究のねらいとした。

3　研究仮説

生徒Ａの実態を明らかにするために、教職員が授業や生活に寄り添いながら学校生活や学習場面での課題を明確にし、ライフステージに合っためあてを立て、一人でできることやがんばれることを増やしていけば、自己肯定感が高まり、意欲も増加し、さらなる成長につながるだろう。

4　研究内容

（１）実態把握（入学当初のＡについて）

（２）指導・支援方針について

（３）生活習慣の確立

（４）学習習慣の確立

5　研究の実際

（１）実態把握（入学当初のＡについて）

ア　日常生活の様子

(ア)よいところ、好きなこと

・素直で優しい性格である。

・芸人やお笑いが好きである。特別支援学級の友人と流行りのネタを披露している。

・話すことも好きである。朝見たニュースや前日家で起きたことを教えてくれる。

・指先は器用ではないが、作業は丁寧に行うことができる。
・後輩の世話をすることが好きである。
・友人に対する悪口などは言わない。
・他人に対して「ずるい」ではなく「いいな」と言うなど、前向きな言葉で話すことができる。

(イ)苦手なこと
・掃除で掃き残しや拭き残しはあるが、指示があれば作業できる。
・生活の中でアナログ時計を活用することが難しい。
・食べようとする気持ちはあるが、偏食である。
・自力通学は可能だが、朝起きられないため保護者送迎（車）になることが多い。

(ウ)その他
・聞くことよりも目で見て判断することの方が得意である。
・声をかけると爪噛みをやめたり、鼻や口から手指を離したりすることができる。
・自分に都合の悪いことを聞かれたときに自分の髪を引っ張る。
・授業などで集中できないとき、鉛筆の芯を自分の目に向け、くるくる回す。更に苦しい状況になると机に伏せ、話しかけても反応しなくなる。
・空間認知が弱いため、いろいろなところに体をぶつけやすい。

イ　学習面

(ア)国語
・小学校低学年程度の漢字を書くことができる。
・読みであれば多少難しい漢字でも文脈から想像して読むことができる。

(イ)数学
・たし算、ひき算は指を使えば計算できる。
・かけ算九九は、自信をもって答えられる。
・わり算が苦手である。
・２桁以上の数字が苦手である。
・「半分こ」や「足りない」という概念がない。

ウ　コミュニケーション能力
・会話の内容が頻繁に変わる。
・突然「〇〇君に△△された」と話し始めることがあり、詳しく聞くとそれが小学校のときの話であったこともあった。「小学校のときは」から始まる話題も多い。
・アニメのキャラクターや芸人の口まねをしていることが多いが、周囲の生徒は何を言っているのか、なぜ言っているのか理解できず、近寄りがたい様子が伺える。
・自分の気持ちがコントロールできなくなると、床に寝転がるなど、自己との葛藤が見られる。

（２）指導・支援方針について

ア　学級経営

特別支援学級を担任するにあたり、昔読んだ『窓際のトットちゃん』に登場する小林宗

作氏の指導や支援を参考とした。例えば、小林氏の運営するトモエ学園では一日に行う授業はすべて黒板に書かれており、何からとりくんでも良いというカリキュラムになっていた。そこで、特別支援学級での授業（主に数学）でその時間の課題を全て黒板に書き、できる問題から解いてみるという手立てをとることにした。また、黒柳氏がハンディキャップを気にせず自信をもって過ごすことができたという「きみは、ほんとうは、いい子なんだよ」という言葉から、叱るのではなく励ましの言葉を多く言うよう心がけた。

同時期、２０１５年度の特別支援教育新任担当教員等研修で、特別支援学級に在籍する生徒は自己中心的な行動が多いため、周囲の人々に認めてもらえず、自己肯定感が育ちにくいと学んだ。そこで、Ａができること、興味のあることに注目し、支援していくことで、円滑な中学校生活が送れるようになるのではないかと考え、とりくむことにした。それには、担任一人だけでは不十分なので、男性支援員や交流授業の担任、心の教室相談員など、Ａと関わる教職員と共通理解をして連携しながら支援を行うことにした。まず認められる経験の少ないＡなので、なるべくＡの意見に耳を傾け、諭すように話したり、その時のより良い行動はどれだったのか一緒に考えたりするようにした。Ａと時間を多く共有する男性支援員にもその旨を伝え、協力を求めた。また、女性担任で付き添えない、支援できない内容について、フォローしてもらえるようにお願いした。

自立に向けてＡに学んでほしいことは、より良い対人関係の作り方や、人の話を素直に受け入れられる前向きな姿勢、そして生活習慣の確立である。そのために、他人の気持ちを理解できるよう、場に応じた言葉を練習する、他人の行為の理由を考える、感謝の気持ちを育てるという心の成長を図ったり、道具の使い方を練習したりするなど、自立に向けた準備をスモールステップで行っていくこととした。

イ　信頼づくり

担任とＡとの信頼関係づくりにも力を入れた。具体的には以下①～③のように指導、支援をすることで、「困ったときに助けてくれる先生」「自分のことを考えてくれる先生」と思ってもらえるようにした。

①担任からＡに対して

・話は遮らずに聞く。質問はＡが話し終えてからする。
・話をするときは椅子に座る、かがむなど、目の高さを合わせる。
・休み時間に必ず特別支援学級へ行き、Ａから様子を聞いたり、学習道具の確認をしたりする。
・できるようになったこと、がんばったことなど、プラスの行動はハイタッチをするなど、一緒に喜び合う。
・帰りの会で「一日の反省」として、Ａががんばったことや聞いてほしい内容を話せる時間をつくる。聞き終えたときには前向きで、肯定的な感想を伝える。
・Ａが困ったと訴えかけてきたことについて、真摯に受け止める。
・特別支援学級在籍について「特別支援学級にいる理由は、Ａが自分のペースで学習するためであること」を伝える。
・落ち込むことがあったときは、Ａが落ち着いた頃に、他の生徒から見えない場所で個別に話す。また、次にがんばることができるよう、１対１で話す時間を作る。その際

には、理解しやすいようにホワイトボードを活用し、視覚優位に配慮する。「何に対して怒られたか」は赤字で書く。「なぜいけなかったか、どうすれば良かったか」は、Aが黒字で書き足す。一緒に内容を確認し、「今後自分でやること、気を付けなくてはいけないことは何か」を自分の力で考える時間を作る。前向きな気持ちにするため「ちゃんとできるよ」と伝える。

・約束後はお互いにいつも通りの対応をし、感情を切り替える。同じ失敗をした場合は約束の内容を確認し、反省できるようにする。

②担任から他の生徒に対して

・Aの行動の特性を交流学級の友人へ伝え、周りの生徒への理解を促す（話す内容によっては、事前にAに話して良いかを確認する）。

③担任から保護者に対して

・Aががんばったことを連絡帳や電話を通して保護者に伝え、連絡を密にする。

・保護者の願いを尊重しながら、Aにとって何が大切か（実態、進路、Aの願い）を伝える。

ウ　重点目標

中学校での生活習慣を確立するために、いくつか指導を行わなければならないことがあったが、各学期に３つくらいの目標を決めた。Aが基本的な生活習慣を確立できるように重点を置き、指導、支援を続ける。

・１学期…「着替え」「職員室の入退室の仕方」「授業中に上履きを履き続けること」

・２学期…「時計を見て行動すること」「家庭学習」「給食の食べ方」

・３学期…「掃除」

上記以外については、長期的に計画、支援することにした。

初めてとりくむことや苦手なことは不安や戸惑いが大きいため、「できなくてもいいから『挑戦してみる』と言おう」と話をした。同時に、課題にとりくむ際には「できるよ」と励ましの言葉をかけ、前向きな気持ちにしてからとりくませるようにした。

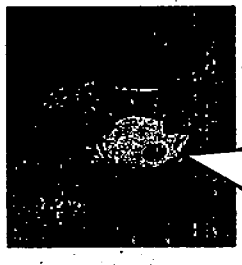
交流学級では友人の立場になって考えたり行動したりすることができるよう、とりくむ内容や注意事項をあらかじめロールプレイングした。

（３）生活習慣の確立

Aの生活上の困難を次のように焦点化し、指導、支援の手立てを考えた。

	入学時の実態	指導・支援の手立て	変容
①	蝶々結びができず、かた結びになってしまう	保護者に相談したところ、蝶々結びが覚えられずマジックテープの靴を履かせていたとのこと。そのため、結び方がわからないことが原因と考えた。 Aと並んで座り①見本を見せながら一緒に結ぶ②ひとりで結ぶ、を繰り返して練習した。	３日ほどで蝶々結びができるようになった。また、かた結びの解き方も覚えることができた。

②	制服のボタンがとめられない	衣服の着脱について保護者に相談したところ、時間がかかるため、かぶるだけのＴシャツばかり着させていたとのこと。そのため、単に不慣れからくる問題であると判断した。 掃除後の着替えでボタンをかける練習する時間をとった。	次第に手先が慣れ、ボタンをとめるスピードが速くなった。 下からボタンをとめさせることで掛け違いが減った。
③	着替えの度にベルトをとってしまい、再度通せない	ベルトを付ける習慣がなかったことが原因と考えられる。 支援員を中心に、ベルトを取らずに着替える練習をした。	ベルトをズボンから外さないで要領よく着替えることを覚えたため、着替えが速くなった。
④	職員室への入退室の仕方がわからない	何と声をかけたらよいのかわからなかった様子である。 職員室への入退室方法や教室の鍵の借り方がわかるよう、学級の廊下に掲示物を作成し、手順がわかるようにした（資料２参照）。また、担任や支援員、上級生が付き添い、入退室の練習を繰り返した。	最初は声が小さく表情も心配そうだったが、次第に自信をもって入退室をすることができるようになった。 職員室にいた教職員が「よくできたね」と褒めてくれたことで安心した様子である。
⑤	授業中に上靴を脱いでしまう	保護者の話では、小学生のときから脱いでいたとのこと。安全上の理由から、できる限り長い時間履いていられるよう指導することにした。 短い時間で上靴を履き続ける練習を繰り返した。「３分間がんばろう」というように練習を始め、５分、１０分、１５分と間隔が長くなった。	９月には上履きを履いたまま授業にとりくむことができるようになった。
⑥	教室移動が間に合わない	前述の①から③で苦戦しているため、１０分間の休憩で着替えられないことが原因と考えた。	着替えの困難が解消されると、教室移動に間に合うようになった。
⑦	机に顔を伏せるか鉛筆を顔の前で回してしまう	保護者の話では、小学生のときから机に伏せたり、鉛筆を顔の前で回したりしていたとのこと。 机に伏せる行動については、授業の内容がＡにとって難しいため、逃避の方法として黙認した。ただし、他の生徒への影響を考え、顔を上げるよう言葉かけは続けた。 鉛筆回しについては、尖った芯を目の前で振り回しており危険なこと、また、手が滑って落としたり、隣の席の女子生徒に当たりそうになったりしたため、芯を机に向けて小さく振るように約束した。	机に伏せる行為は、交流授業の回数を減らしたころからなくなった。 また、鉛筆を目の前に持っていく行動が見えたときに言葉かけを続けたことで、ノートに向かって振るようになった。 今では余程のストレスがない限り鉛筆を回すことはなくなった。
⑧	公衆電話の使い方がわからない	公衆電話は、帰りの連絡の際に毎日利用していた。その際、担任もしくは支援員が付き添い、手順を確認しながら電話をする様子を見守った。 自宅の電話番号は覚えていないため、テレフォンカードの袋に書いておいた。	「受話器をもってテレフォンカードを入れる。電話番号を市外局番から押す」ことを毎日繰り返したため、１週間ほどで使い方を覚えることができた。

⑨	トイレでズボンをすべておろしてしまうため、裾などが床についてしまう（男性支援員より）	男性支援員に付き添ってもらい、言葉かけをしてもらった。	Ａが尊敬する上級生が一緒にトイレに行った際に「ズボンを全部おろしてトイレするのはおかしい」と声をかけてくれたことで、次第に改善された。
⑩	時計が読めない	Ａの話では、家ではデジタル時計を見ていたため、時計が読めずに困ったことがなかった。しかし、本校はノーチャイム制であり、時計が読めないと時間に遅れてしまうため、練習することにした。 壁掛け時計では目盛りを読むには遠すぎるため、実際に手にもって勉強できるよう目覚まし時計を用意し、週に２～３回練習した。 担任と支援員だけでなく、継続して学習できるよう数学の授業でも練習時間をとってもらった。	時間はかかるが、次第に時計が読めるようになり、生活場面で生かせるようになった。 午後１時は１３時といった判断もできるようになった。
⑪	床に寝転がることがある	床に寝転がってしまうのは特別支援学級内だけでのことだったが、交流授業に行くことを拒み、ささやかな抵抗として起き上がらず、交流授業に遅れることが多くあった。また、廊下側のロッカー前で転がってしまうため、他の生徒の目が気になった。 そこで、休み時間や課題に良くとりくんだときの「ご褒美タイム」に、窓側の床に転がっていいことを約束した。 窓側の一角にレジャーシートを敷き、転がっていい場所がわかるようにした。	床に寝転がらないという約束を破って床に転がる場面はなくなった。 当初は交流授業に行きたくないため寝転がっていると思ったが、リラックスのために転がっていることに気が付いた。そのため、気分転換の時間を積極的に取り入れ、連結できるタイプの柔らかいマットを用意した。
⑫	給食の食べ方が気になる	白いご飯に味噌汁の具をのせて食べていた。保護者に相談し、了承を得た上で特別支援学級にて給食を食べることにした。お椀の持ち方や口への運び方だけでなく、苦手な食材も必ず一口食べること、食べきることができる量まで減らすことを繰り返した。  牛乳はストローだと味が濃く感じるので、カップで飲むように工夫した。担任、１年生２人でお揃い（色違い）の「マイコップ」を用意し、特別感をもたせた。透明のため、飲んだ量も一目瞭然！（飲む量は相談しながら入れる。）	次第にマナーを覚え、残さず食べられる日も増えた。苦手な牛乳に関してはコップを使うことで、最終的には半分くらいまで飲めるようになった。

教室環境に配慮した。座席はＡの右に同級生、左に上級生の席を設け、活動に困った際、教えてもらいやすいようにした。また、道具を片付けられるようにするために、絵を描いて掲示したりシールを貼ったりして物理的構造化を図ると、整理整頓にも目が向くようになった（資料１）。これらのような生活経験が増えるに伴い、Ａは次第に学校生活に溶け込むようになり、２学期が始まる頃には落ち着きが見られるようになった。

掃除の面でも、成長が見られるようになった。小学校の頃に「小ぼうき係」だったのか、作業学習の授業でも掃除の時間でも長いほうきや雑巾で掃除をすることができなかった。そのうちに同じ学級に所属する上級生もAが担当していた外掃除をやりたがるようになった。Aは友人への思いやりから、掃除場所の分担を話し合いたいと相談してきた。話し合いの中で、それぞれの掃除分担場所を曜日で割り振ることになった。最初は担当日以外に小ぼうきで掃除をして上級生から注意されていたが、担当の場所を確かめるように声をかけたり、掃除場所がわかるように分担表を掲示したりすることで、曜日と掃除場所が一致するようになった。また、作業学習の時間で雑巾の絞り方や拭き方を練習したことで、拭き掃除も好きになったようである。

こうした特別支援学級内でのとりくみで、できることが増え、体育祭や合唱コンクールに意欲的に参加できるようになった。また、Aのがんばりを認めて声をかけてくれる友人が増え、交流学級での居場所ができた。担任が声をかけなくても進んで交流学級に行くようになった。

（4）　学習習慣の確立

保護者はAの特性を受け入れられないようだった。そのため交流学級と同じ学習内容を特別支援学級にも求めた。進学先は公立高校もしくは私立高校を考えているようであった。A自身も私立高校への進学を希望し始めた。

担任としては、特別支援学校への進学を勧めた。いずれ親元を離れて自立した生活をしなければならない日が来る。そのため「手に職」をつけたほうが良いと考えていた。Aにも保護者にも、私立高校に行く場合の将来像を話した。その上で特別支援学校の職業コースについて紹介し、学校見学の案内もしたが、興味をもってもらえなかった。これがAのためになるのか様々な葛藤はあるものの、将来を決めるのは最終的にはAである。そのため、Aの進路のために今担任としてできることを指導、支援することとした。

ア　支援学級でのとりくみ

(ア)予定の見通し

・日課表を掲示するだけでなく、朝の会でクラス全員分の一日の予定を口頭で確認し黒板に書いておくことで、誰が、いつ、どこで、何をするのか、持ち物は何か見通しをもてるようにした。変更点は黄色のチョークで書き、追加されたことがわかるようにした。同様に、月の予定をホワイトボードに書くことで、いつ、どんな行事があるのか、課題や手紙の提出日がいつなのか自分で確認できるようにした。

(イ)学習内容の定着

・帰りの会で、交流授業の内容を復習するようにした。例えば、社会科で学習して覚えた内容について担任が補足説明をし、もう一度Aに言わせて確認した。

・毎日、数学の計算問題をホワイトボードに4～5問書いておき、下校までに解かせるというとりくみを行った。

(ウ)家庭学習について

・最初は様子を見るため自由に家庭学習にとりくませたが、何の教科からとりくんで良いかわからない様子だった。Aが一番とりくみやすいということで、小学校高学年程度の漢字練習に切り替えた。しばらくすると学校で購入したワークを使いたいとAが申し出てきたため、第1段階としてワークの漢字を書き写すことに決めた。(資料4)

・第２段階では２００字マスノート（Ａが小学校で使っていたもの）を使い、手本をひとつ書き、下に一行分練習させたが上手くいかなかった。練習する量が多かったと思われる。（資料５）

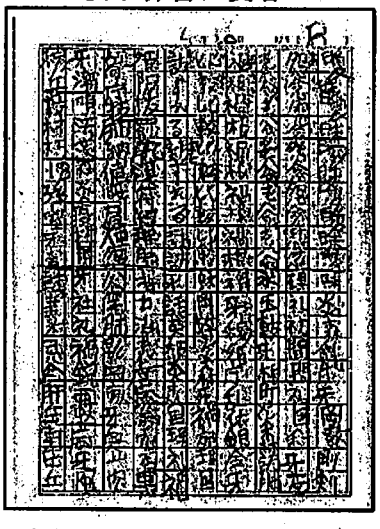
・第３段階では１文字ごとに空欄をつくり、手本の真下に練習させた。Ａのやる気に合ったようで、よくとりくんでいた。（資料６）

・ワークの練習も試みた。画数の多い漢字が増えたが、隣のページに答えとなる漢字や読み方が載っていることもあり、「今日も家庭学習で漢字ワークをやります」と自ら申し出る場面も多くあった。画数の多い漢字を練習した達成感と、交流学級の友人と同じ漢字を書いているという満足感が意欲を向上させたようである。（資料７）

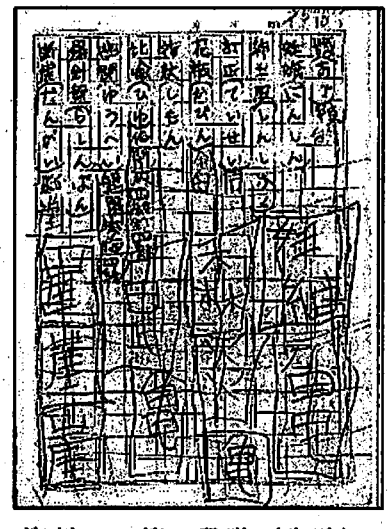
・現在では作文練習や連絡帳、日記等で書けなかった漢字を加えながら、同様の手段で漢字練習を行っている。いくつか書けるようになった漢字もあり、喜んでいる。

・提出したかどうかが目で見てわかるように、カレンダーにシールを貼った。資料８は２年生の時のものだが、前年度は生徒３人分の欄を同じ用紙に貼り、誰がどれくらいできているか見えるようにした。提出が遅れたときには上級生からも早く出すよう声をかけてもらった。

漢字練習の変容



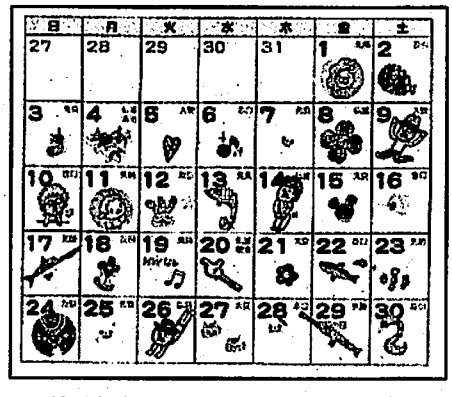
資料４　第１段階



資料５　第２段階（失敗）

資料６　第３段階（現在）

資料７　好んで勉強していた漢字ワーク（副教材）



資料８　提出確認カレンダー

イ　交流学級での授業

・できる限りＡに付き添い、ノートの取り方や書く言葉を伝え、授業の参加の仕方を指

導した。様子を見守りながら、慣れてきたら付き添う時間を短くしていき、授業者以外の支援がなくても学習できるようにした。

・廊下側の一番後ろに席を設け、担任が支援しやすいように配慮した。

・特別支援学級の授業で、ワークなどの課題にとりくむ時間を設けた。

・課題の提出日が遅れるときは教科担任に自分で遅れる旨を伝えるようにさせた。

・テストの範囲が配られたとき、範囲や提出日を口頭で確認し、プリントにマーカーを引くようにさせた。

・テストがスムーズに受けられるように、Aに付き添い、5分前に着席できているか、机上に必要なものが出ているか、机の中は空になっているか、名前を書いているか、物を落とした際に手が挙げられるか、解答用紙などの回収ができているか確認し、適宜言葉をかけた。

6　成果と課題

（1）成果

○Aの実態を明らかにしたことで、生活体験の不足からできずにいたことが多くあることがわかった。支援の方法や内容を焦点化し場の構造化を図ることで、一人でできることやがんばれることが増え、自己肯定感につながった。

○褒められる・認められる場面が増えたことで、担任以外の教職員や友人との信頼関係が深まり、相手の目を見て会話ができるようになった。Aの中に自信ややる気が生まれ、以前よりも積極的に課題にとりくむようになった。

（2）課題

○特別支援学級でできることが、交流学級に入ってしまうとできなくなってしまうことも見られる。そのため、普通高校に進学した後の不安が残る。

○Aのできることが増え、自信がついてきたが、慣れていないことには尻込みしてしまう様子がまだ見られ、自己肯定感が十分に高まっているとは言えない。中学校のうちに多くの経験をさせたい。

（3）最後に、現在のAについて

現在、Aは中学3年生。私立高校への進学を希望している。入学試験で作文と面接が課されるため、作文練習や正負の計算、分数のかけ算及びわり算など、積極的に学習している。

ここまでAが成長できた要因のひとつは、担任と支援員がうまく連携できたことが挙げられる。担任が付き添えないときには支援員が行動を共にし、「できること・できないこと」を見極めて報告してくれた。そして、その場に応じてAに「するべきこと」を伝え続けてくれた。そのため、担任の見立てと支援員の見立ての両面から指導内容をしぼり、余裕をもって、継続的に支援に当たることができた。

また、昨年度から特別支援学級で後輩ができたこともあり、上級生としてかっこいいところを見せたいと、勉強を中心に前向きに生活していることも挙げられる。生活も良好で、特別支援学級にいる際は自分のことを自分でできるようになり、様々な教職員から「成長したね」「お兄さんになったね」「がんばっているね」と声をかけてもらっている。Aも1

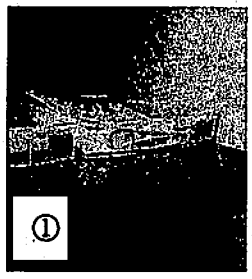
年生の時に床に寝転がっていたことなどを覚えており、お世話になった支援員を懐かしがっている。

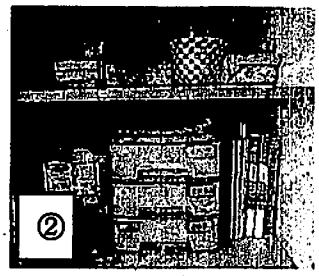
学校でのがんばりは毎日連絡帳を通して伝えたり電話連絡をしたりしていたが、Aの口からも褒められて嬉しかったことが保護者に伝わり、連携を密にすることができた。そのため、保護者は担任の指導について理解を示している。Aの実態や進路についても納得しており、今のままでは学習能力や自力で通学する力、人間関係の構築などで、進学後にAが苦労するであろうことも理解している。それでもなお、私立高校の進学を希望している。

今後の見通しとしては、目の前の課題をどうすれば達成できるか自力で考え、あるいは解決方法を思い出して行動できるよう、卒業を見越した指導を続けていく。

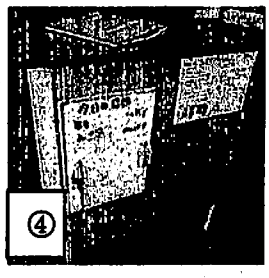
資料編

「教室環境」。前年度から生活している生徒がいるため、場所はできる限り変えず、何がどこにあるかわかりやすいようにした。


①


②

③


④

①棚。２段目に記名済みの透明のケースがある。学校からの手紙を入れる。また、課題や提出物を入れる。授業プリントも一時的に保管可能。

②棚。色鉛筆、はさみ、のりなどを入れた３段ボックスがある。給食のストローもここにある。

黒板。３人の生徒の１日の予定を書く。変更は黄色で書く。

③Ａの机。ごみを捨てるビニール袋とティッシュがかかっている。右に同級生、左に上級生。声をかけてもらえる位置。

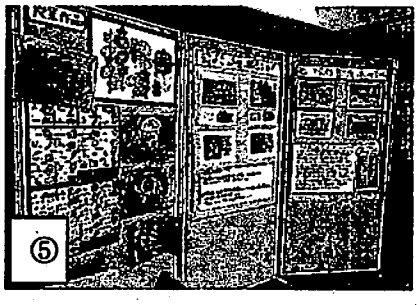
④教卓。Ａに意識してほしいことをポスターにして掲示。

⑤パーテーション。作品や行事の写真を貼る。

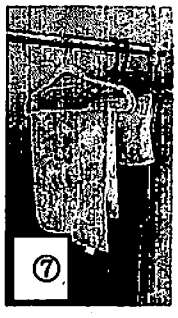
⑥転がってよいスペース。マットは冷蔵庫の上に片付ける。

⑦ハンガーがある。学生服をかけて良い。ハンカチを忘れたときのためのタオルも干してある。

⑧ロッカー。廊下側に個人用。縦に三個使える。出席番号で区別。上段に五教科、中段に技能教科、下段に鞄を置く。ビニールテープで置くものの名前が貼ってある。窓側は教材教具。


⑤

⑥


⑦

⑧

資料１

「職員室の入退室の仕方」を覚えるため、廊下に貼っていた掲示物。

朝、学校に来たら
G組のカギをあけよう！

荷物は廊下に置いていくよ。
入るときは「失礼します」を
大きな声で言おう。

①職員室へ行く

②ドアを3回ノックして入室

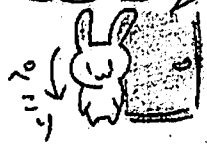
③クラス、名前、用件を言う
例）「○年○組の東 太郎です。
G組のカギを取りに来ました。」

④キーボックスの前で，もう一度
「G組のカギを借ります。」

⑤職員室を出て，G組へ

⑥カギは電気のスイッチのところにかける

「失礼しました」は
先生方の方を向いて
言おう。



①～③は基本的な職員室の使い方。覚えよう☺

資料２